

20. September 2003

15. November 2003

Jüdisches Museum Berlin

Vortrag / Besuch einer Delegation des Himeyuri Heiwa Kinen Shiryokan - Himeyuri Peace Museum Okinawa.

Wo: Jüdisches Museum Berlin.

Vortrag / Interview. Veröffentlicht in der Zeitschrift Sekai 3, März 2004, no. 724.

Wo: Iwanami Shoten Verlag, Tokyo / Japan.

Ein Vortrag über den Vergleich zwischen japanischen Peace Museums und deutschen Gedenkstätten.

Das Jüdische Museum Berlin wird in Japan als Gedenkstätte betrachtet.

Sekai:

過去に直面して理解する以外に、 過去を克服する道はないのです

ツエラ・ベントさん
ベルリン・ユダヤ博物館上級キュレーター

二〇〇二年九月、ベルリン市に衝撃的なデザインで完成した。外壁は藍色に輝き、上から降りてくる光が透ったようなガラスが、全体が輝いているように、見る者に不安な気持ちを誘う。煉瓦色のバルコニー風のベルリン博物館とは著しい対照を呈す。これが国立ベルリン・ユダヤ博物館だ。

開館して二年、すでに来館者は一五〇万人を超えた。博物館としての規模は小さいが、来館者数はドイツで二番目を誇る。

「始めは、こんなに人が来るとは予想していませんでした」

同博物館の建築に疑問から開け、展示物の収束、展示まで行なうための博物館上級キュレーターのツエラ・ベントさんが昨年一月、来日した。

「ユダヤ博物館」といって、初めは青いホロコーストのことばかりが展示されていると聞いていました。悪いのではありませんが、子どもに見せていいか、という話までありました。でもこの博物館では、ホロコーストのことばかりではなく、ユダヤ民族の二〇〇〇年におよぶ歴史を、様々な面から展示しています。どの民族もそうであるように、ユダヤ民族にも、悪い面もあれば明るい面もある。子どもたちにも楽しめるように、工夫したのでです。

ベントさんがベルリン州政府からユダヤ博物館建設の依頼を受けたのは、一九七九年。与えられた課題は、博物館の設計、建設と展示物の収束の二つだった。

一九八九年、博物館の設計についてコンペを行ない、一六五の応募の中から、米国系ユダヤ人の建築家ツエラ・ベントさんが作品を選んだ。超七段の建物で、最初は「こんな建物は建てられない」とか「展示物をおくような建物ではない」という批判、意見が多かったという。建物の議論に一年を費やした。

ようやく建物の議論に決着がつくと、次に展示物についてかという議論が始まった。議論に展示すればいい、という考え方も、こういう建物には普通の展示の仕方ではだめだ、という考え方もあって、六年間、議論したという。

「この建物は、普通の軍艦ではない、浮城」を表しています。当たり前のお話を聞いて、そこに展開するのは驚きです。しかし、私は博物館の専門家として、ホロコーストという「浮城」を浮城をしてみたかった。」

入り口を入ると、二つの道が分かれている。それは、二〇世紀ドイツにおけるユダヤ人の運命を象徴するもの。「一つの道は、『浮城』に向かう。行止まりには誰も居ない。中に入る天井に小さな窓があるだけ閉ざされた空間となる。第二の道は、『浮城』を表す不規則な形のある空間にたどり着く。それは生存の道だが、不安定な生活をも暗示する。」

第三の道は、ユダヤ民族の歴史を表す。その道は急な階段になって三階まであり、その三階から階段が始まると、不規則なカタチをとる。苦闘も多かったが、しかしこれまで来た道である。そしてこれからは続いていく道である。

一九五一年に広島、長崎を訪れ、記念式に参加して感動したというペントは

Vera Bendit
 ヘブライ大学（イスラエル）、ハイデルベルグ大学（ドイツ）などで学ぶ。ユダヤ人歴史学者、作家、ヘブライ語、
 1979年のユダヤ博物館設立にかかわり、博物館の収蔵の責任者、建設計画のコーディネーター、最初のキュレーター（記事）などである。文化、同僚博物館上級キュレーター、博物館学、大学講師。

「私は、以降日独の交流、協力に積極的に関わっている。若い世代に過去をどう伝えるか、白紙には共通の課題がある。と、しかしその彼女が、日本では過去を忘れよう、心に留めておこうという雰囲気を感じるといいます。」

「これまでたくさんの人々に出会った経験からいって、忘れようとして心に留めるのはよくない結果をもたらします。」

たとえばある人は、展示館のコップをみてそれが取崩しに連れていかれた社団が使っていたコップだと思いつく。本当にそうか分かりません。それで、心に留めていたすべての過去を思い出しました。またあるドイツ人は、同じコップを見て、かつて自分の母親がユダヤ人の家から流産を認んで使っていたの思い出し、パニックに陥りました。

過去に直面して理解する以外に、過去を忘却する道はないのです。」

■ 世界史年表 2014 (1) のと 2014 より

16. Mai 2005
Japan-Tag im Jüdischen Museum Berlin

Vortrag / Anlässlich der Einführung des Japan-Programms im Jüdischen

Museum Berlin.

Wo: Jüdisches Museum Berlin.

Vorstellung des Führungsprogramms und des Souvenirbuches „Entdeckungen im Jüdischen Museum“ in Japanisch (übersetzt von Professor Kensuke Shiba, Tokyo). Ausarbeitung des Führungsprogramms und Guidelines für die japanischsprachigen Führungen von Dr. Hilda Joffe und Dr. Gideon Joffe.

5. Oktober 2005

Zur Anzeige wird der QuickTime™
Dekompressor „TIFF (Unkomprimiert)“
benötigt.

第18回 CGS

ワークショップ 「ベルリン・ユダヤ博物館をめぐって」

日程・会場他・日時： 2005年10月5日（水）

13:15～14:45 ・場所： 東京女子大学

24301教室 ・使用言語： ドイツ語・日本語

プログラム _____ ◇司会： 芝

健介（東京女子大学） ■報告：

Dr. Vera Bendt（元ベルリン・ユダヤ博物館学術総合局長）

「ベルリン・ユダヤ博物館をめぐって」共催：

■文部科学省「特色ある教育支援プログラム

女性学・ジェンダー的視点に立つ教育展開）」（東京女子大学）

■ジェノサイド研究の展開（CGS）

Wo: Tokyo Woman's Christian University, Department of History, Tokyo / Japan.

9. Oktober 2005

„Wiedergutmachung und Entschädigung“ in Deutschland

Vortrag / Symposium „Vergangenheitsbewältigung und Wiedergutmachung“.

Nach 1945: Ein Vergleich zwischen Deutschland und Japan.

Mit Simultanübersetzung ins Japanische von
Professor Klaus Spennemann.

Wo: Kansai Seminar House der Nippon Christian Academy, Kyoto /
Japan.

Entschädigung für die Opfer politischer Gewalt war im 60. Jahr nach
Kriegsende in Japan ein Dauerthema. Vielen Menschen waren die
Kriegsverbrechen der Japaner im 2. Weltkrieg nicht bewusst, unter
Kriegsverbrechen verstanden viele im Allgemeinen nur die Atombomben
auf Hiroshima und Nagasaki im August 1945.

Leseprobe des Vortrags in Deutsch und Japanisch:

Es gibt zwei Arten von Entschädigung.

1. die Entschädigung, die die Bundesrepublik Deutschland an den Staat Israel geleistet
hat.

2. die individuelle Entschädigung für Einzelpersonen. Dabei gibt es drei Bereiche:
Schaden an der Gesundheit, Schaden an der beruflichen Existenz, Schaden an Eigentum
und Besitz.

二種類の補償がありました。

第一は、ドイツ連邦共和国のイスラエルに対する補償です。

第二は、個人に支払われた損害賠償金です。それは三つの損害に対する補償、
すなわち健康の損害、職業の損害と財産損害です。

Ich möchte zuerst die Entschädigung der Bundesrepublik an den Staat Israel behandeln
und erinnere an die Ausgangssituation: Ungefähr 200.000 Juden hatten in Europa den
Krieg überlebt und waren als DPs – Displaced Persons – nach ihrer Befreiung aus
Konzentrationslagern in Auffanglager gekommen und warteten darauf, auswandern zu
können. Die Vereinigten Staaten lehnten die Aufnahme von ca. 200.000 Überlebenden
des Holocaust ab. Als Auswanderungsland kam daher nur das 1948 gegründete Israel in
Frage. Nach den Vorstellungen der USA sollten die finanziellen Leistungen, die von der
Bundesrepublik an Israel gezahlt wurden, Israel die Aufnahme der Holocaust
Überlebenden ermöglichen.

Frage der Entschädigung für Israel ankoppelten.

注目すべきことは、当初、ドイツはホロコーストに対する責任や補償金を支払う意思も一切公表しませんでした。イスラエルに対する補償を要求したのはアメリカでした。アメリカはイスラエルに対する補償をドイツ連邦共和国の設立（1949年）、西の同盟への加入と経済復興援助（Marshall Plan）の条件にしました。

Erst 1950 kam es auf Wunsch der USA zu dem legendären Treffen zwischen Adenauer und David Ben Gurion, dem Ministerpräsidenten des neugegründeten Staates Israel in New York. 1952 wurden in den „Luxemburger Verträgen“ Einzelheiten der Wiedergutmachungsleistungen an Israel vereinbart. Die Gesetze der Bundesrepublik zur Entschädigung wurden 1956 im Bundestag beschlossen.

1950年に、ニューヨークで有名になったアデナウアー首相とベン・グーリオン大統領との（アメリカが要求した）会議が行われ、1952年にいわゆる「ルクセンブルク条約」でイスラエルに対するドイツの補償の詳細が合意されました。1956年に連邦議会にドイツの補償に関する諸法律が決議されました。

先ずドイツがイスラエルに支払った補償を説明します。約20万人のヨーロッパのユダヤ人が戦争に生き残り、強制収容所が開放された後、難民（displaced persons DP）として一時的な収容所に移動し、そこから他国へ移民することを期待しました。しかし、アメリカはこの難民を受け入れることを拒否しました。この難民を受け入れることができるのは、1948年に設立されたイスラエルだけでした。当時のアメリカの考えでは、イスラエルによる難民の受け入れを可能にするためにドイツの補償、すなわち経済援助が必要でした。

Deutschland selbst hatte zu damaliger Zeit keinerlei Schuldbekennnis abgegeben und zu keiner Zeit ausgedrückt, dass es zu Entschädigungen bereit wäre. Es waren die USA, die die Frage der Gründung der Bundesrepublik Deutschland und deren Aufnahme in das westliche Bündnis sowie die Aufbauleistungen aus dem Marshall-Plan an die

Frage der Entschädigung für Israel ankoppelten.

注目すべきことは、当初、ドイツはホロコーストに対する責任や補償金を支払う意思も一切公表しませんでした。イスラエルに対する補償を要求したのはアメリカでした。アメリカはイスラエルに対する補償をドイツ連邦共和国の設立（1949年）、西の同盟への加入と経済復興援助（Marshall Plan）の条件にしました。

Erst 1950 kam es auf Wunsch der USA zu dem legendären Treffen zwischen Adenauer und David Ben Gurion, dem Ministerpräsidenten des neugegründeten Staates Israel in New York. 1952 wurden in den „Luxemburger Verträgen“ Einzelheiten der Wiedergutmachungsleistungen an Israel vereinbart. Die Gesetze der Bundesrepublik zur Entschädigung wurden 1956 im Bundestag beschlossen.

1950年に、ニューヨークで有名になったアデナウアー首相とベン・グーリオン大統領との（アメリカが要求した）会議が行われ、1952年にいわゆる「ルクセンブルク条約」でイスラエルに対するドイツの補償の詳細が合意されました。1956年に連邦議会にドイツの補償に関する諸法律が決議されました。

Die Luxemburger Verträge vereinbarten keine individuellen Wiedergutmachungsleistungen an Einzelle. Vielmehr ging es in diesen Verträgen um Reparationsleistungen eines Staates an einen anderen. Die wesentliche Regelung war, dass Israel stellvertretend für die gesamte jüdische Gemeinschaft den Kollektivanspruch des Staates gegenüber der Bundesrepublik hatte. Auf dieser Basis konnte der jüdische Staat einen Entschädigungsanspruch für jene Bürger geltend machen, die nach der Staatsgründung 1948 als Überlebende nach Israel gekommen waren. Dabei war es gleichgültig, welche Staatsangehörigkeit diese Überlebenden vorher gehabt hatten. Die Reparationsleistungen, insbesondere Transferleistungen wie zum Beispiel technische Geräte, Schiffe, Fahrzeuge und Staatshaftungen, wurden als Hilfe zur Eingliederung der Überlebenden verstanden und dienten insgesamt dazu, den wirtschaftlichen Aufbau Israels zu unterstützen, dürften nicht zuletzt aber auch zu den ersten kleinen Säulen des deutschen Wirtschaftswunders gerechnet werden.